

稀代の女誑おんなたらしか。

チーズ・プレートを前に

心の中で赤面する

今は亡き伊藤正孝さんには恩義が有る。「朝日ジャーナル」編集長だった彼は、同じく今は亡き三神忠・会津小鉄会理事が山科区に構えし事務所へと単身、足を運んで下さっていたのだ。連載担当のY氏を含む僕ら3人が、強持でで鳴らすS理事と面談すべく入洛の幾日か前に。

誰もが二の足を踏む。仮令、編集人なる地位に在ろうとも。責任を取らずに切り抜けてこそ責任者に相応しき器、と嘯く政官財の輩やからが跳梁跋扈ちようりょうはつこする。言うに及ばず、ジャーナリズムなる世界とて。伊藤さんは、稀有な存在だった。

「いやあ、田中さん、驚きました」、と後に語ってくれた。「何時何分に誰某だれそれから電話、如何なる用件、と全てノートに記してありました」。三神さんの事務所で詰める男衆の事務処理振りに、甚いたく感動していた。「ジャーナル編集部では考えられませんよ」。外出中に掛かってきた自身への電話すら、覚え書きが無かったりするのだから、と微苦笑した。

三神さんは、僕の記憶に間違いなければ、産業廃棄物処理の仕事を営んでいた。「産廃」なる単語が未だ一般名詞化していなかった時分。併せて、金融業も。而して会津小鉄会に於いては、ヘンリー・キッシンジャー的職掌^{しやくしやう}だった。

京都が本拠地の会津小鉄会自体が、「キッシンジャー的存在」だったのやも知れぬ。山口組、住吉会を始めとする全国の広域暴力団の折衝役として、彼は東奔西走していたのだ。以下の情報も、三神さんが伊藤さんに齎^{もたら}した。竹下登なる経世会を率いる人物が「閣將軍」に頭を下げに行く、との。日時も伝えられた。記者とカメラマンを、目白の田中角栄邸前に送り込む。

「竹下登君こそは、新しい日本の総理大臣に相応しい、誠に立派な政治家先生で御座います」。

「褒め殺し」を繰り返す街宣車が霞が関・永田町周辺に出没し、木曜クラブに反旗を翻せし人物は困惑していたのだ。田中角栄邸に向いて非礼を詫びるのが収束に際しての唯一の条件だ、と高松に本部を置く日本皇民党の総裁は、「仲介人」に対して述べた。

尤も、1回目はスカだった。現れなかった。再度、日時が三神さんから伝えられる。大雨の中、今度は疑心暗鬼で待機する。程なく、黒塗りの車から政治家は単身降り立ち、傘も差さずに濡れそぼつ。事前情報を得ずして、活写能わざる光景。その後も三神さんは、何処から入手してくるのか、隠密情報を提供した。

星霜を経て、「読売新聞」社会面で「糾弾」される。「朝日新聞記者 暴力団関係の結婚式に」
「有名俳優が仲人を」。大阪本社版のみならず東京本社版に於いても、大見出しが躍った。三神さ

んの娘が結婚したのだ。無論、彼女は堅気。結婚相手も又。グリコ・森永事件の昔から先般の容疑者自殺事件に至る迄、「泣く子も嗤^{わら}う」との得難き名誉を堅持する京都府警察本部が漏洩^{リーク}したのだった。

記者会見に臨んだ畏兄・山城新伍氏は喝破する。「ヤクザの家に生まれた子供は、披露宴すらしてはならんと追い詰めるのか」、「金権政治家の娘の、政略結婚を祝う席ならノー・プロブレムか」、「結婚する二人に罪は無い。なのに、誰も仲人を引き受けんから買って出た」、「その男気さえ咎められては敵^{なま}わん」。

山ちゃん、と親しみを込めて僕は呼ぶ京都で生まれ育った人物の発言は、些かええ恰好しいかも知れぬ。だが、あの三神さんが相好を崩す様子を思い浮かべ、落涙を禁じ得ず。因みに列席の新聞記者は、「朝日ジャーナル」編集部出身のF氏。件の「特種」に留まらず、一方ならぬ恩恵を三神さんから「朝日新聞」は蒙^{こうも}る。にも拘らず、社内処分がF氏に下された。其れも此れも、全ては「ラルーナ」の一文が始まりだったのだ。

祇園町の芸妓を助手席に侍^{はな}らせて、「儂^{わし}ら、これからハワイですわ」と誇らし気に語った三神さんの自裁は、関西国際空港が開港する直前だった。金融業をも営んでいた彼は、泡沫経済の崩壊と共に立ち行かなくなってしまったのだ。トカレフを蟬^{こひかみ}谷に当て、三神家の墓碑の前で命を絶った。盛夏。

固体炭酸^{ドライアイス}を敷き詰めた亡骸。数多の芸妓とホステスが、泣き崩れた。都をどりの切符が捌き切

れぬ、と愁訴されれば数十枚単位で引き受け、その月の売り上げが足りなくて、と哀願されれば同伴出勤に応ずる。交接の有無を問わず。その「優しさ」が三神さんの身上で、故に脂粉の香りで噎せ返る通夜。

だが、暗中飛躍の生涯を終えた彼が属せし世界の面々は、絶えて訪れなかった。鏝に於ける「殉職」には非ざるが故。自害は最も恥ずべき行為、と任侠道では定める。殊更に美化する、自我無き日本の文学とは対極に位置する。

2年後、伊藤さんも身罷る。6月6日、南元町の千日谷会堂で告別式。その年、即ち阪神大震災勃発の年、久方振りに伊藤さんと見えた。39歳の誕生日に当たる4月12日・水曜日。有楽町マリオン上層階の「朝日新聞」談話室。

「私の出会った人」なる毎金曜日夕刊のコラムを、伊藤さんは担当していた。「田中さんを扱いたい」との申し出を受け、11日に神戸と一緒に回る予定だった。だが、遅筆の僕は、果たせる哉、「小説新潮」の短篇に呻吟する。10日夕刻、築地の編集委員室に電話を入れる。日にちを改めて貰おう、と考えて。

既に伊藤さんは退出していた。携帯電話もポケットベルも携行していない。自宅に連絡を取るも、不在。午前零時を回っても猶。徹夜で僕は原稿用紙に向かい、脱稿し得ぬ儘に朝を迎え、待ち合わせ場所のウェスティンホテル大阪に電話する。非礼を詫び、明日ならば必ずや御一緒に、と伝えた。「実は今週分なんです。一人で回ります。訪れたら良い場所を、幾つか教えて

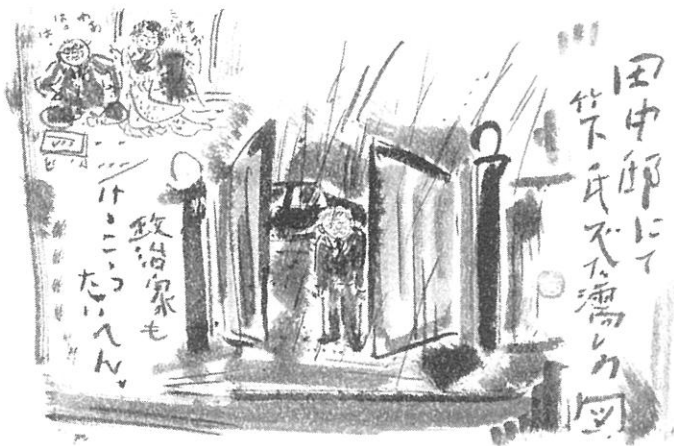
戴けませんか」。忸怩たる思いで僕は、避難所やテント村、加えて、公衆浴場を列挙する。僕の方の原稿は、12日昼過ぎに脱稿した。

「いい話が聞きましたよ」、と伊藤さんは語り出した。長田区日吉町の幸せの湯。

「あの人は女誑しだよ。だって、男湯の日は、やって来いへんもん。番台係の息子さんが教えてくれましたね」。おらかな正義感が田中には存在する、と過分の評価を与えてくれた文章は、件の高校生の発言から始まった。

理由は存在したのだ。化粧水を配るには、女湯の日でなくては。それとて、長田の地では年輩者が大半でして、と弁明する僕の前に、チーズ・プレートが運ばれてきた。「お誕生日、御目出度う御座います」。給仕係の女性が眩く。うら若い。それなりに秀麗。

瞬間、僕は訝った。何故、知っているのだろう。若しかして、僕の読者だろうか。ややあって、はたと気付き、



心の中で赤面した。伊藤さんが予め言い伝えておいてくれたのだと。それ以外に考えられぬ。にも拘らず、一人で脂下やにさがっていた。僕は、命いのちの恩人おんじんとの最期の瞬間にも稀代の女誑しを演じていたのだ。